

空飛ぶたい焼き

雨和 七瀬

泳ぐたい焼きの話は聞いたことがあるだろうか。聞いたことが無くとも、きつと頭の片隅でちよつとした想像ができるだろう。他の魚に紛れて茶色いたい焼きが泳いでいる……。

では、空飛ぶたい焼きはどうだろうか。

脳内の検索候補で、某アイドル主演の映画およびその原作小説が出た人もいるだろう。あるいは、飛んでさ……いや、何でも無い。

違う。飛ぶのは黒いドーナツ型のものではない。お菓子族和菓子類に分類される、あのだい焼きが飛んだのだ。

それは元号が万和になり、日本各地でお祭り騒ぎしていた頃だった。私は昼食を済ませた後になんとなくたい焼きが食べたくなり、氷戸駅前のお餅屋「しのはら」まで買いに行った。すると店には普段とは比べられないほどの列ができあがっていた。様子をうかがいにカウンターの前に行くと、店先のブラックボードには「新元号 ぼんな味」と丸文字で書いてあった。

「あら、志摩さんのお嬢さん。あなたも『ぼんな味』を買いに来たの？」

「ぼんな味」の宣伝を見ていたら、先頭付近に並んでいた老齢の女性に話しかけられた。

「ぼんな味とはどんな味か、少し気になりました」

その後も少し他愛も無い雑談をし、女性がぼんな味のたい焼きを購入すると、お互い会釈して別れた。私もぼんな味が気になったので並ぶことにした。

十分くらい経ったころ、並ぶのが苦手な私は少し疲れを覚えた。幸い、カウンターのすぐ近くまで来ていたので、カウンター横に並べてあるイスに座った。

「来てくれたのか、シマ。明けておめでとう」

店の手伝いをしていたシノが歩み寄ってきた。休みの日でも親の手伝いをしているのだから、偉いものだ。これで「宿題写させてくれ」などと言わなければ良いのだが。

シノは紙コップに入ったお茶を差し出してきてきた。今日はまだ少し寒いのでありがたい。

「母さんが『幼なじみなんだから』ってさ」

「ありがとう、シノ。……あけておめでとう？」

私は首を傾げながらお茶を受け取った。新年も新元号も一緒だろ、とシノは笑いながら言った。

「……まあ、この祝賀ムードなら同じようなものだ」

シノは私の言葉に対して微笑むと、思い出したようにまた話しかけてきた。

「そういや、今日もこしあんにするの？」

「いや、今日は限定のにしようと思っているんだ」  
するとシノは目を輝かせた。

『『ばんな味』食べてくれるのか!? それ、俺が考えたんだよ! 今までで一番おいしくしたからな!』

特に意味はなさそうだが、シノは大きく体を動かし、体全体で喋っていた。子どものようだ、と少し面白く感じた。

「ああ、この前わざわざ私の教室まで来て『新しい味作らせてもらえる』って言うってたな」

「そう! それなんだよ! これが人気だったら、また作らせてもらえるんだ!」

心の底から嬉しそうにしているシノを見てみると、私までつられて笑ってしまった。

「そうか。じゃあ楽しみな」

自分の番が来たので、私はお茶を飲み干し、コップをシノに渡すと立ち上がり、カウンターではばんな味を一匹頼んだ。

「聡美ちゃん、いつものこしあんはどうする?」

店主の茜さんが親切に聞いてくださったけれど、今回は買わないことにした。

そしてばんな味のたい焼きを受け取ろうとしたそのとき、カウンターの奥、調理場からたい焼きが飛んできた。

「オイ、オマエ! トブンダ!」

飛んできたたい焼きは、まだ茜さんの手にあるたい焼きに話しかけていた。私はすでにもう訳が分からなくなっていた。

「タイ……?! タタ、ターイ!」

話しかけられた方は奇妙な声(?)を上げて茜さんの手から飛び出し、私のすぐ脇をゆっくり飛んで行った。さらに、喋りたい焼きは他の焼き上がったたい焼き達にも「モットタカク! モットハヤク!」と言って、引き連れて同じように低空飛行でどこかへ行ってしまった。状況が理解できなかった私はしばらく固まっていたが、シノは全力で走り、一番遅かった一匹だけ捕まえた。

「タ!? ターイタイ!」

たい焼きの抵抗も虚しく、シノは頭からかぶりついた。

「ふあ、ひはふいふあへふんふあつふあ(あ、シマにあるんだった)」

……なんであの時食べてしまったのか、と私は未だに根に持っている。

篠原家の居間で私たち四人はA4に印刷した、SNS上に今日アップロードされていた「飛行するたい焼き」の写真を囲んでいた。どれもはつきりと写っていて、「しのはら」のたい焼きであることは明確だった。

「店から飛んで行ったたい焼きは、祐星が食ったのも合わせて十八匹。そのほとんどが『ばんな味』だった」

店主の旦那さん、祐太さんが調理場での出来事を話し始めた。その話ではどうやら、最初に飛び出したのは冷蔵庫で保存していた、ぼんな味の試作品らしい。捕まえようとしたものの、足下や頭上を勢いよく飛ぶのを追いかけて腰を痛めてしまったらしい。

「賢いのね、たい焼き……中身を詰めているだけあるわ」  
茜さんも真剣に考察をしている中、シノは腹を抱えて必死に笑いを堪えていた。

「祐星、真面目に考えろ！うちの売り物なものもそうだが、聡美ちゃんが買ったたい焼きなんだぞ！」

祐太さんがちやぶ台をドン、と拳で叩いた。シノは背筋を伸ばして咳払いをすると、本棚からこの付近の地図を取り出して広げた。

「まず、たい焼きがどこ行ったのか、だ。多分だけど、まっすぐ進んだと思う」

シノは地図に、お店からたい焼きが飛んで行った方向に赤い線を引いた。

「一体どこへ向かっているんだ……？」

シノは線の先に星を描いた。

「ここが目的地。だってあいつら、空を飛びたいんだろ？」

シノ以外の三人は顔を見合わせ、星印のついた場所を見た。

「空港……？ いやいや、たい焼き共はもう飛んでるだろ」

祐太さんは訝しげにしていたが、茜さんと私はなんとなく納得した。「もっと高く、もっと速く」飛ぶために飛行機を使うのだろう、と。その事を祐太さんに説明すると、なんとなくではあるが理解は得られた。その間茜さんはたい焼き達の写真をじっくりと見て、スマホでSNSをチェックしていた。

「とりあえず空港で飛行機に乗られると一巻の終わりだな。じゃあ先回りするしか無いか」

「そうねえ……。たい焼き達を追い抜くのは良いのだけど……」

茜さんは言葉を濁らせ、写真で顔を隠した。普段なら「車を出しましょうか」とか言うはずだ、と疑問に思った私は茜さんの方を見た。すると茜さんはさっと目をそらした。すると茜さんは持っていた写真をちやぶ台の真ん中に置いた。三人で写真をのぞき込むと、飛行するたい焼きのしつぽのすぐ右下に、何か四角い影が映り込んでいる。

そしてさらに、SNSにアップロードされた文章付きでも見せていただいた。そこには、「たい焼きがキーケース落としてったw ちゃんと交番に届けたの偉くない？」と書かれていた。私のスマホでもユーザー名で検索をかけて今までの発言を見ると、空港の近くに住んでいる人のようだった。

「このキーケース、母さんのだよな。たい焼きに持って行かれたんだな」

シノの言葉に茜さんは頷いた。その顔は真っ青になっていた。

「ごめんなさい、気付かなくて……」

カウンターのすぐ裏に荷物を置いていたらしいので、調理場から出て行っていた焼きのうち一匹が引つかかったと考えられる。

「……そうか。それはそれで早く取りに行かないとな。となると、バスで行くのが速いな。間に合わなくなる前に行かんとな」

祐太さんは、シノに「アレ」を取ってくるように言うと、シノは立ち上がりため息をつくど、とぼとぼと居間を出て行った。茜さんは私や祐太さんに何度も謝った。

「大丈夫ですよ、拾ったのもいい人みたいですよ」

二人で茜さんを宥めていると、虫捕り網に虫かごと、と言ったような、夏休みの小学生のような出で立ちのシノが戻って来た。シノは少し恥ずかしそうにしていた。

「……まさか虫取り網でたい焼き捕まえるの？」

「文句なら父さんに言えよ。俺は釣り竿の方が良いって言ったんだよ」

「いやそういう問題か？」

シノにツッコみながら祐太さんの方を見ると、どことなく楽しそうにしていた。

「くそ、自分は腰痛めて行かないくせに……!」

……正直かわいそうに思えたが、虫捕り元少年シノにはちょうど良さそうに思えた。

「その網、新品なのか？」

シノは一瞬固まったが、そっと親指を立てた。不安なので、私は家から新品の網を持って行くことにして、一回篠原一家と別れた。

「やあんもう、タイちゃんったら食べちゃいたいくらい可愛いわあ」

家に帰ると、二階から母の猫なで声が聞こえてきた。

誰もいない家でやっているのはそこそこ気持ち悪いのでやめさせようと様子を見に行くと、母は自室で何か机の上のものに対して話しかけていた。

「しっぽびこびこ動かしてるう、もおタイちゃんかーわーいーいー」

「うわ……。お母さん何してるの……」

振り返った母は表情筋を最大限に活用してへらへら笑っていた。

「あら、聡美じゃない。おかえりー。ふふふ、見てよこの子。とっても可愛くない？」

そうやって母が差し出した鳥かごに入っていたのは、茶色くて甘い匂いのする……。

「たい焼きのタイちゃんよ!」

「なんでそういうの拾ってくるの……」

私は頭を抱えた。いや、十八匹のうち一匹が捕獲された状態で見つかったのは良いことなはずだが、嬉しくは無かった。

「お母さん、それ、「しのはら」から脱走した奴なんだ」「あら、聡美ったら、たい焼きがそう簡単に空を飛ぶ訳ないでしょ？」

だめだこりゃ。そんな風に思うのは失礼ではあるが、この母はもう救いようが無い。母の説得は諦めて待ち合わせ場所の駅に向かうことにした。

「聡美ー。飛んでるたい焼きが他にもいたら、もう一匹連れてきて欲しいの。タイちゃんは眉が男の子っぽいから、女の子っぽいかわい子、お願いね」

「断る。……ああ、自分でも捕まえるなよ」

母の「そんなあー」とかいう情けない悲鳴を背に、私は家の鍵を閉めた。

駅で集合できたのは午後三時だった。篠原家は全員虫捕りの格好をしていた。祐星に関しては本気で寒そうにしている。しかし気になるのはそれだけでは無かった。

「あの……祐太さんまでその格好なんですか？」

「祐星に『言い出しっぺも着ろ』って言われてなあ。いやー、この歳で短パンは照れくさいな」

祐太さんはゲラゲラと笑いながらそう言った。シノを睨むと彼は目を逸らしてスマホを見た。

「ごめんねー、聡美ちゃん。聡美ちゃんの分用意できなかったのよー」

やはり虫捕り少年ライクな茜さんが駆け寄ってくる。

「……お気遣いありがとうございます」

私は服装の事は度外視して、バスに乗り込むと時間の計算を始めた。

バスは十分に出発し、たい焼き達のルートのひとつ隣を走行する。こちらは時速四十キロ。一方たい焼きは母に捕まるくらいだから、早歩き程度の速さ、つまり速くても時速七キロ程度だろう。たい焼き達が逃げ出したのが二時間と前のことでは無いので、十四キロは行っていないだろう。

時間と移動距離の関係式から、ここから二十キロ先のバス停で待ち伏せできる事が判明し、そこで降りることにした。

集中を解いてバスの中を見渡すと、虫捕り網がそこかしこの席から生えていた。

「……まだゴールデンウィークなのに虫捕り？」

思わず呟くと、前に座っていた二人の女性が振り向いた。

「私たち、虫じゃなくて、インスタ映えするたい焼きを捕まえに行くんです。皆さんは違うんですか？」

目眩のする回答だった。世間一般の人は確認済み飛行たい焼きを見て「インスタ映えする」という感想を持つのか……。その思考は理解できない。

「そうなんですよー。うちたい焼き屋なんで、写真撮ったら広告に使えそうだなー、って」

シノが後ろから乗り出して女性と喋り始めた。さすが店の手伝いをしていただけある。

「えーっ、そうなんですかー？　すごいですね！　じゃあ『鳥間』で降りるんですか？」

「はい！　お姉さん達もですか？」

「そうですよー。ネットでたい焼きがいつ、どこにいるか教えてくれるサイトがあつたんですよ」

そして、このバスに乗っていた全員が同じバス停で降りた。私の苦労を返して欲しい。

「……なあ、シマ。ちよつと良いか。相談があるんだ」

篠原夫妻が着々と準備を進める中、シノが小声で話しかけてきた。人の少ない方に連れられると、シノはこわばった顔で話し始めた。

「さっきのお姉さんさ、たい焼きの位置を教えてくださいな。サイトがあるって言ってたろ。なんか変じゃないか？」

そう言っただけでシノはスマホで開いた件のサイトを見せてくれた。データは逐一更新され、地図に示されたたい焼きは予想通りこちら側に向かってきていた。しかも直接見て目測した速度とほぼ同じ速度だった。

「こんな大がかりなものを、たった数時間で……」

言われてみれば、数時間前に地方都市で空を飛んだ、しかもまだニュースで全国に知れ渡った訳でもないたい焼きの追跡なんて変な話だ。

「できるわけ無いだろ。もつと前から作ってあつたって事だよ」

シノは何か思うところがあるようだった。このときの私は、彼の表情にその程度の感想しか抱かなかつた。

話し終えて待つこと数分。周りの人に協力してもらい、写真を撮ったらたい焼きを譲ってもらうことになった。

これで一人一匹捕まえたら全部捕まえられる事になる。「たいやききたよー！」

一番前にいた少年がたい焼きに向かって駆け出した。それに続いて他の子どもも我先にと言わんばかりに走り出した。

「元氣だな、子ども達は。シノも行ってくれば？」

「誰が行くか！」

子どもとインスタ映え狙いの女性の二段構えのおかげで、たい焼き達はさらに後ろで控えていたこちら側まで来なかつた。数匹やってきたが、それもシノと祐太さんでほとんど捕まえきってしまった。

「父さん、腰が痛いんじゃないのかよ」

シノは息を切らした祐太さんに歩み寄った。その表情は真剣で、しかし心配とは別の何かだった。

「……休んだら調子が良くなったんだ」

祐太さんは虫かごに入れたたい焼きを見つめながらそう返した。

「……なら良いけどさ」

シノは伸びをして、こちらを見た。

「お前は捕まえたか？」

私は首を振った。

「そもそもこっちまで来ないものを、どう捕まえると言うんだ」

「え？ そりゃこう、クイツと」

そう言っただけでシノがなめらかな動きで虫捕り網を動かしている横を、何かが横切った。

「何匹か逃げたぞ！ 追え！」

前にいた男性が叫びながら走ってきた。その後ろには、前に陣取っていた子どもや女性の姿もあった。

「追いかけるぞ！」

シノは私の手を握って走り出した。そんなに速くないのでペースを合わせられない訳ではないが、やはり体力的に辛いものがあった。

「自分で、走るから、……手を放してくれ」

シノはそつと左手を放し、その手を見つめた。

先回りした足が速い人たちと、私たちのような足が遅い集団で囲み込むことができた。その円陣を構成している中に、篠原夫妻の姿は無かった。

たい焼き達は怯えるかのように小刻みに震えていた。

「タイタ……」

一方囲んでいる人たちは、全員が互いの様子を窺っていた。その表情は鬼気迫るもので、今にもつかみ合いの喧嘩が始まるかのような雰囲気だった。それに対してシノはその中で一人、やはり真剣味を帯びたものではあったが、どこか思い詰めたような顔をしていた。

「シノ、たい焼きを捕まえないのか？ たい焼き屋の息子なら、真つ先に捕まえても誰も責めたりしないだろ」

「……ああ、そうだな。シマも、たい焼き一匹くらい取つたらどうだ？」

返事こそあったものの、まさに心ここにあらず、といった様相だった。そんなシノの様子に違和感を覚えながらも、たい焼きに向けて網を振り下ろした。しかしその後、他の人も一斉に網を振った。そのせいで、網が引つかかり、全員が動けない状態になってしまった。

「ちよつと、網どかしなさいよ！」

「お前の方が上だろ!? お前が先にどかせよ！」

「あーっ！ 折れたー！ おい、今動かして僕の網折った奴、弁償しろよ！」

目を伏せたくなるような光景だった。自分の網を早く抜こうと引つ張ったために円陣は崩れ、隙間からたい焼き達が逃げ出していた。それなのに、そんなことに目もくれず、言い争っていた。

私の網は一番下にあつたのですぐに抜けそうではあつたが、抜いたら火に油を注ぐようなものだったので、網は諦めて逃げたい焼き達を追いかけようとした。

「もう追わなくても良いのよ？ 聡美ちゃん」

茜さんが私の腕を掴んでいた。優しくはあるが、決して放さないという意思が表れている強さだった。

「あれはもう、食べられる必要は無いの。二人で話し合つてそう決めたわ」

動悸がした。その微笑み、言葉、そして、手が、今見えている茜さんが、薄っぺらいような気がした。下手な芝居でも見たような気分だった。

今の茜さんに従つてはいけない。でも、振りほどく言葉が見つからない。

「なんで……ですか……？」

飛んできた網に驚いたり、周りの雰囲気気圧されたのもあつたが、声を出すのもやつとだった。

「空を飛んだたい焼きなんて、食べたくはないでしょ？ だから……」

「話題作りに野放しにしよう、つてか？」

シノが立っていた。その声からは怒りのようなものを感じた。

「祐星？ ああ、食べ物で粗末に扱うな、つていつもあなたに言ってるものね。怒るのも分かるわ」

少し腕を掴む力が弱くなったように感じたが、まだ抜けそうに無い。おとなしくしていることにした。

「そうだけど、それだけじゃない。俺は、シマに新しい味を食べてもらいたかった。なのに……、母さん、何か足しただろ」

茜さんの顔は見えなかったが、手に汗が滲んできていた。

「食べたものね、バレる訳よね……」

「何入れたんだよ！」

シノの語気が強くなった。普段温厚なシノがこんなに怒るのは、保育園の頃に「おいしいのは、こしあんか？ぶあんか」で喧嘩したとき以来、いや、それ以上だった。

「……代々伝わる、伝説のこしあんよ」

「……はっ！」

思わず私は脱力してしまった。が、シノは違ったようだ。

「ごめんなさい、祐星の作った『ばんな味』は私も驚くくらいおいしかった。でも、売れなかったらかわいそうだと思つて、『入れると絶対に売れる』と言われるこしあんを作つて入れたの」

シノは震えていた。うつむいた顔がどんな顔をしていたかは、今でも分からない。



「……俺は、信じてもらえなかったのか？ どうせ売れない、って事だったのか……？ そのせいで、このままだと捕まえても俺の作った味を……食べてもらえないのかよ」

茜さんは私の腕を掴んだままシノに近づき、シノの頬を撫でた。シノは泣いていた。それこそ、子どものように、顔をくしゃくしゃにして。

「でも、祐星が本当に心を込めて作ってくれたのは分かったわ。うちに伝わるあんこが入ったたい焼きは、職人が心を込めて作ると、人を惹きつけるたい焼きになるの」

「……母さん」

茜さんは手を頬から頭に移した。

「それだけで、あなたも、あなたの作ったたい焼きもすごいのよ」

シノは歯を食いしばって呼吸を整えた後、唸るように、母であり師でもある茜さんに対して叫んだ。

「食べてもらえなきや、意味が無いだろ……！」

シノは茜さんの手を払って涙を拭くと、そこらに散らばっていたポロポロの虫捕り網を拾い、茜さんに被せた。

「きやあつ！」

茜さんが網を取ろうとして私の腕から手を放した。

「行くぞ！」

シノは手を差し出したが、「私の方が速いだろ」と返して二人で走り出した。本当は、そんなことは無いが。

結局空港までの数キロを走る羽目になった。着いた頃には空港では大騒ぎになっていた。観光客は面白がっていたが、職員は必死になって捕まえようとしていた。

「良いか！ 不審物をここから通すなよ！」

私は近くの写真を撮っていた観光客を見つけて話しかけた。

「たい焼きは何匹いるんですか？」

「ああ、三つあった中で、あと一つ残ってるんだ。流暢に喋って、他のたい焼きに指示してた奴がな」

やれやれ大変だよ、と言いながら、その観光客はまた撮影に戻ってしまった。

シノと顔を見合わせた。まだ鼻は赤いものの、平常に戻っていた。

「あの今飛んでるのが、冷蔵庫から出てきたって言う奴か……ん？ 冷蔵庫……？」

シノは少し考え込み、急に顔を上げた。

「アイツはたぶん試作品だ！ まだ母さんが手を加えてない、本物の『ぼんな味』だ！ シマ、あれ食べてもらえるか……？」

シノは今になって不安そうな顔をしていた。変なところで神経質な奴だ。

「ここまで来たら引き下がれないし、気になってたんだ。どんな味か」

私が微笑みかけると、シノは少し安心したように胸をなで下ろした。

「やっぱ『ぼんな味』が？」

「それもだけど、……シノの作ったたい焼きの味が、ね。だから、手伝って欲しい」

シノは頷いて作戦を聞いてくれた。

「じゃあ、そのタイミングでやれば良いんだな？」

「ああ」

その直後、周囲がより騒がしくなった。  
「待てたい焼き！ 入るな！」

お互いに頷いて、シノと私は全力で走った。そして検査場の目の前でシノがしゃがんで、私はその背に乗って、全身をバネのようにして跳んだ。

飛んでるものには、跳んで対抗する。今思えばもっとマシな方法は思いつけなかったものか。

跳んだ私は、着地のために手を使うので、背（尾？）を向けるたい焼きに齧り付こうとした。

「マダ、ソラヲトビタイ！ イキテイタイ！」

たい焼きがいきなり喋るものだから、驚いて少しタイミングが遅れてしまった。噛みちぎる感覚はあった。しかしその後前転で着地して目の前を見ると、尾びれだけ無くなったたい焼きが逃げていくのが見えた。つまり私は尾びれだけ食べるのに成功した。職員に検査場から追いつけぬ間にゆっくりと噛みしめた。

爽やかな、しかし穏やかな味だった。飾り気は無いが、特別感のある、そんな味だった。

「シマ。……どうだ？ 『ぼんな味』。おいしい？」

「……うん、きつとおいしいと思う」

しかしこれには欠点がある。ある種致命的である。

「え、何かダメな所あったか？ 頼む、教えてくれ！」

たい焼きを飲み込んで一呼吸おいて、私はこう言った。

「……絶対こしあんベースの方がおいしい」

……当然のごとく、公衆の面前でつかみ合いの喧嘩が始まった。

結局『ぼんな味』はお蔵入りになってしまった。どうやらない焼きが意志を持ったのはあんこのせいではなく、『ぼんな味』のあんこベースのクリームのせいだったらしい。伝説のあんこ以上に謎の力を帯びてしまったので残ったクリームは志摩家で引き取り、タイちゃんの餌にしている。不本意ではあるが。

しかしシノの才能と努力は両親に認められ、また新しい味を「条件付き」で考案させてもらえるそうだ。

「聡美、ニュース見た？ 今度はヴェネチアらしいよ」

クラスメイトの青山がノートの上に新聞を置いてきた。その一面に「世界旅行たい焼き ヴェネツィアへ」と書かれていた。

「……邪魔だからどけて」

青山が「そんなぁーつれなーい」と言いながら新聞をどかしたので、また作業に戻った。

「あ、それ……へー、篠原と初めての共同作業だっけ？ たい焼き作りも大変だねえ」

にやついた青山を蹴飛ばして、材料リストの作成に戻った。

……顔が熱いのは、きつと知恵熱だ。